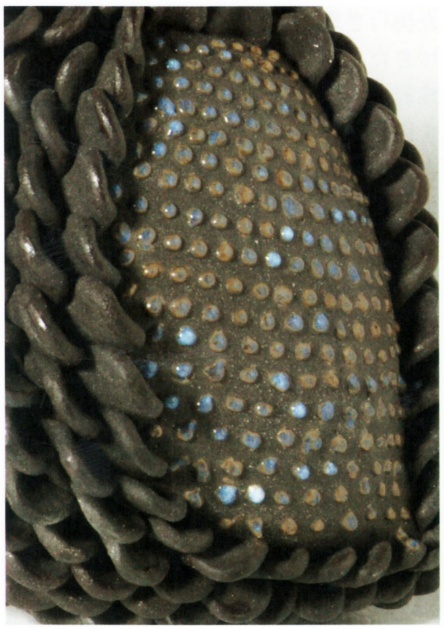
阿部 潤
ABE Jun

制限と創造　作品「植」及び研究報告書
Study on the Relations between Limitation and Creation Work “Syoku” with Research Paper

デザイン学領域群 クラフト領域



「植」
上段写真左から
380×190×270 mm
470×270×280 mm
460×280×370 mm
470×260×300 mm
300×230×200 mm
陶

序論

本論は、創造に関わる「制限」と作り手の関係性を考察し、自身の制作に活かすことを目的としている。

第1章　創造性を生む「制限」の事例

生活や知識などの「制限」が要因となった創造性を例示する。第1節では、第二次世界大戦時のアメリカの日系人収容所での創作活動を取り上げた。物資や生活圏の制限、精神的な抑圧、葛藤が創作の原動力となっている。第2節では、17世紀にオランダ人であるモンタヌスが日本の文化や風俗を紹介した『日本誌』を挙げた。当時の限られた資料から類推し、描かれた『日本誌』の挿絵は、写実性に限界があり、日本でもヨーロッパでもない不思議な絵となり、独特な魅力を放っている。知識の制限がオリジナリティを誘発する事例である。第3節では、西村伊作を例に挙げた。建築家や教育者として活躍した西村伊作は、大正デモクラシーの中、生活全般における啓蒙活動にも力を注いだ人物である。独学で建築を学ぶことでこれまでにない建築を生み出し、当時の社会情勢に反骨精神を持ち私財を投じて文化学院を設立した。専門教育の制限と、社会情勢の制限が西村伊作の創造性に火をつけたと考えられる。

第2章　工芸分野の作家の「制限」との関わり方

工芸分野の作家研究を通して、それぞれの作家がどのように「制限」を制作活動に活かしているのかを概観する。第1節で、陶芸家の川崎毅を取り上げた。川崎は自然さを人為的に作るために、制作時に自らの手の及ぶ範囲を制限している。第2節では、バスケタリー作家の関島寿子を扱った。関島はこれまでにない新しいカゴを作るために、習った技法は使わない、きれいな材料は使わないなどの制限を自身に課した。第3節で、廃材や木材、紙などを使った作品を制作する造形作家の島添昭義を取り上げた。島添は、制作に行き詰っていた時に、材料となるものが手に入ったことがきっかけとなり、制作に向かうことができたという。また、作品の鑑賞者が持った島添の印象を作品に反映させることがあるという。素材の制限と鑑賞者の持つ目線の制限が島添の作品を左右するのである。第4節で陶芸家の中島晴美、第5節で鍛金作家の橋本真之を挙げる。両者とも素材を選択することで、その素材ならではの作品を生み出している。

第3章　創造に関わる「制限」の分類と考察

第1節では、1～2章で挙げた創作に関わる制限の事例を「内的要因」と「外的要因」に分類した。前者を創造者自身が決定するもの、後者を創造者の外部が決定するものとする。第2章第1節で扱った川崎の作品制作の手法は、自らの意思によるものなので、「内的要因」。一方、第1章第1節で取り上げた日系アメリカ人収容所での創作活動は、外的な圧力により物資や自由が限られたことがきっかけとなっているため「外的要因」である。事例を分類し、詳細を見ていくと、「内的要因」には「素材」「技術（技法）」「最終形態のビジョン」、「外的要因」には「知識」「社会情勢（時代背景）」「生活圏」「物資」があると考えられる。「内的要因」は、「外的要因」比べ、より細かい事項に対する制限と言えることが分かる。そして、「内的要因」が個人的であるのに比べ、「外的要因」は社会的であるとも言える。創造者個人の中から発せられる制限も、創造者自身が社会情勢など外からの刺激を受けている以上、「内的要因」は「外的要因」に包含されると考えられる。第2節では、前章までに挙げてきた事例が、制限の活用事例として正しいことなのかを、笹山央の「工芸的批評論」の言葉を引用・参照しながら論証した。笹山が1970年代に当時の工芸に対して感じていた以下に記す①～⑥の不満や反発と、1～2章の事例を比較する。①工芸は使えるものでなければいけないという考え方しかできない工芸家の存在。②技術偏重の考え方。③工人は自己主張してはいけないという考え方。④工芸は手づくりでなくてはいけないという考え方。⑤前衛工芸という意匠。⑥古い時代のものは良く、現代のものは良くないという考え方。笹山が当時感じたこれらの反発は、ものづくりをする立場の人間が、自らに設けた、創造性を刺激しない「誤った制限」であると言える。ここで、前章までで取り扱った事例と笹山の反発を比較した。具体例を挙げる。①の「実用にこだわるが、用を突き詰めて考えていない工芸家」と比較したいのは、第1章第3節で取り上げた西村伊作の建築である。日本家屋の良さを取り入れながら、西洋的で家族を中心とした生活様式を提案した西村伊作の建築は、まさにこれからの人間の生き方のビジョンを提示していると言える。また、建築に限らず、教育活動や子供服のデザインなどが素晴らしいのは、生活改革を目指した姿勢によるものである。笹山が反発した当時の工芸家が制限に囚われながら制作していたことと、第2章までの制限に良い影響を受けながら創作を行った事例を比べると、創造者の制限に対する意識が「制限」の善し悪しを決定しているということが分かる。創造者が客観的に制限を見つめることで、創造者自身の立ち位置が明らかになり、作るべきものの道標が立ち現れてくるという結論に至る。

第4章　作品「植」研究報告書

「陶」という素材が私にとっての制限である。工程の中で、陶はゆっくりと、しかし確実に変容していく。制作の中で一度、目を離すと違った表情を見せる陶は、変化を積み重ねる、焼成後は始めとは全く異なる姿を見せる。この様子は、植物の成長の過程に似ていると感じている。また、植物はそれ自身の特性を持ちながら、環境など外的要因による変化を見せる。その様子は、陶の作品に、素材の特性によってもたらされた変化、作者がもたらした変化、そして作者が素材の特性を利用することによって得られた変化に重なるものがある。以上の理由から作品「植」を制作した。

終論

自身の内外に存在する「制限」を意識することで、漫然とした創作活動から脱却できる。「制限」を理解することは、自分の置かれている立場や社会を理解することに繋がり、既存のものづくりを模倣するのではなく、より強固な意思を持ち時代の変化に耐えうる作品づくりに役立つ。